



消えた
デー夕



川崎ゆきお

師走のせわしい時期、前田のパソコンが動かなくなった。壊れたのだ。古いデスクトップで十キロほどある。まだそんな古いパソコンを使っているのかという感じだが、不思議と動いていた。

問題はデータだ。古いメールなどが残っている。殆ど見ることはないのだが、昔で言えば手紙や葉書のようなものだ。郵便物ならそれなりに残っているかもしれない。メールなので保存場所そのものが消滅してしまった。ただ、それらは古い記録で、今現在必要なものではない。

前田は大事な情報はネット上のスペースに上げており、今すぐ困ることではない。

「バックアップは取ってなかったの？」

「自動バックアップソフトを使っていたんだが、起動する度に、うるさいので、最近は手動にしていたんだ」

「自動だから、手間はかからないだろ」

「古いパソコンなので、起動が遅いんだ。だから、少しでも早くしようと。それに同期中動作がおかしくなる」

「まあ、パソコンが壊れることはよくあるから」

「しかし、昔のメールやファイルが消えてしまうのはなあ……」

「そうだね」

「写真も結構あるんだ。記念写真だけだね。それもパーだよ」

「業者に頼んで、取り出して貰えば？」

「パソコンは何度も修理というか、修復して貰ったけど、ハードディスクがもう限界だって言われた。いつクラッシュするか分からないって」

「じゃ、その日が来たんだ」

「それが、昨日だった。動いていたから、壊れるなんて想像もしていなかったよ」

「また復旧して貰ったら」

「高いんだ」

「パソコンが買えそうだね」

「どうせ、もう買わないといけない時期だから」

「バックアップしてなかったことが問題だけど、やってなかったってことは、それほど大事なデータが入ってなかったんだろ」

「まあ、そうなんだけどね。でも残念だ。思い出なんかが消えるから」

「頭の中で、覚えておけばいいんだよ」

「ああ、でも、すぐ忘れるから」

「忘れてもいいような内容なのかもしれないよ」

「そうかなあ」

「本当に大事なものなら、それなりに守ろうとするさ。しっかりバックアップしてる」

「そうなんだけど、壊れたときにしか役立たない」

「そのためにやるんだよ」

「まあ、いいか」

「うん、諦めるんだね。昔の人なんて、写真なんて残していないよ」

「ああ、カメラそのものがなかった時代だからね」

「手紙もそうさ。文字が書けない人も多かったんだから」

「うーん」

「だから、物で残していたんだよ。行楽地で買った土産物の人形とか」

「ああなるほど。それを見ると、旅の思い出なんかを思い出すわけか」

「まあ、そういうものも、捨てたりして、消えてしまうけどね。大事な物は残している。その物じゃなく、そのものの思い出を残すためにね」

「そういえば、小学校の修学旅行で買った土産物、まだ何処かに仕舞ってるよ」

「何を買ったの」

「貝殻だよ」

「ハハハ、貝殻か。その近くの海の貝殻かどうか分からないけど、その土地の空気がまだくっついていていかもしれないしね」

「まあ、諦めて新しいパソコンを買うよ。しかし、メールアドレスが消えたので、連絡が……」

「必要なら、相手からメールが来るよ。電話もかかってくるよ」

「そうだね」

「儚いものだよ。パソコンのデータって」

「うん」

了